

研究課題名：がん患者が抱える精神心理的・社会的問題に関して、

その原因や関連要因になり得る社会的要因に着目し、その是正を目指した研究

課題番号：H26-がん政策-一般-002

研究代表者：国立がん研究センター 支持療法開発センター長 内富 庸介

## 1. 本年度の研究成果

### 1-1. 抗がん治療の中止の際に医療者に望まれる行動に関する研究

#### 背景と目的

患者の意向に副った医師のコミュニケーション技術研修法は医師の共感行動を増加させ、患者のストレスや医師への信頼感と関連することから、患者の意向を重視したコミュニケーションは重要である。特に抗がん治療中止の知らせを伝えることは腫瘍医の最も困難な診療技術でありながら、その時期の患者が医療者に望む行動は現在のところ明らかになっていない。そこで、抗がん治療中止の状況における医師に望まれる行動をがん患者に直面調査し、是正すべき要因を明らかにする。

#### 対象と方法

国立がん研究センター中央病院・東病院に通院・入院中のがん患者で、担当医が治癒・延命を目的とした抗がん治療を推奨できないと考え、それが伝えられた者100名

質問紙による横断調査

#### 進捗状況

先行研究や対象者との面接等から得られたデータを基に質問紙を作成し、現在データ収集を開始した。

### 1-2. 腫瘍医が直面する難しいコミュニケーション場面に指針を示すための実験心理学的研究

#### 背景と目的

腫瘍医が最も困難と感じる診療場面を明らかにしてその課題を抽出し、その課題に対して実験心理学的手法を用いて患者が望む行動を明らかにする。

#### 対象と方法

聖隷浜松病院の6人の腫瘍医を対象にフォーカスグループディスカッション（FGD）を行い課題抽出する。

#### 進捗状況

以下の診療場面が抽出された。

- 1) 初診外来、治癒不能ながんの病名告知、治療方針の説明
- 2) 初診外来（あるいは再発時）、治癒不能ながんの病名告知、治療方針の説明。治療の選択肢を提示して、「先生にお任せします」と言われた時の対応
- 3) 患者が予後を知りたいと言うが家族が患者に言わないでほしいと言った場合の患者への対応
- 4) 手術不能な転移がんの診断がついた患者の2回目の外来受診
- 5) 老老介護で家族・社会的支援の乏しい軽度認知症の高齢患者に抗がん治療かBest Supportive Care (BSC)かの面談を行う

今後、上記の課題について実験心理学的検討行う。

### 1-3. 医師の患者の心の痛みに対する認知的共感に関する研究

コミュニケーション技術研修（CST）に参加した医師20名（介入群）を対象に、CST前後に表情認知課題（表情映像から感情の評価を求める）を実施し、対照群として年齢、性別、臨床経験年数をマッチさせたCSTに参加していない医師20名（対照群）にも同課題を1週間程度の時間を開けて実施した。評定値は、前後差を算出し、群間差をt検定で比較した。その結果、介入群、対照群の平均年齢は、34.1±3.5歳、33.7±5.3歳、性別は、両群ともに男性12名、女性8名、臨床経験月数は、99.8±33.7ヶ月、101.5±57.3ヶ月であり、統計的に有意な差は認められなかった。表情課題（嫌悪、恐怖、悲しみ、驚き）に対する感情評価は、介入群でCST後に評定値が有意に大きいことが示唆され、CSTにより行動だけでなく認知的共感も改善することが明らかとなった。今後、医療者の情動ストレス反応について解析を進める。

### 1-4. 各医療者のコミュニケーション特性に関する研究

#### 背景と目的

医療者（薬剤師、療法士）のコミュニケーション特性を発達心理学的に明らかにし教育研修法

に資する点を明らかにする。特に、H26年度には、薬剤師の指導管理料（＝カウンセリング）が報酬化された。心理・発達特性・コミュニケーションスタイルのうち関係する要因を明らかとし、コミュニケーションのあり方のうち、視線追跡装置などを用いて修正・研修可能な要因を抽出する。個々の心理・発達特性に合わせた研修プログラムの作成・追加が可能となる。

療法士に対しては、がん患者にリハビリテーションを実施する際、どのような場面、あるいはどのような状況のときにコミュニケーションの難しさを感じるかを実態調査により明らかにする。

#### 対象と方法

医療者（薬剤師、療法士）にコミュニケーションの困難さに関する質問紙票を郵送して回答を得る。

#### 進捗状況

1) 質問紙票を作成し、病院薬剤師279名から回答を得た。データ解析中である。

2) H26年度に質問紙集を作成したので、これまでに厚生労働省がんリハビリテーション研修を受講した全国の療法士総計約2800名を対象に調査実施を準備している。

## 2. 前年度までの研究成果

平成26年度採択

## 3. 研究成果の意義及び今後の発展性

### 1-1. 抗がん治療の中止の際に医療者に望まれる行動に関する研究

データ解析により是正すべき医療者の改善点を明らかにし、まず厚生労働省委託事業として開催されているコミュニケーション技術研修法に反映させる。

### 1-2. 腫瘍医が直面する難しいコミュニケーション場面に指針を示すための実験心理学的研究

腫瘍医が困難を感じるテーマに関して臨床的重要性の高い候補が抽出された。2014年12月17日に第二回目のFGDを開催し、臨床的重要性や実施可能性が最も高い研究テーマを設定し、研究計画書のドラフトを作成し、実験後、成果を踏まえてコミュニケーションの指針を公表する。

### 1-3. 医師の患者の心の痛みに対する認知的共感に関する研究

研究結果から、CSTは表情認知の側面から医師の認知的共感を強化する可能性が示唆された。今後は、CSTに参加する医師の情動の変化、および生理反応を測定し、対照群との比較から、情動的共感の強化に関する検討を行う。極く近い将来、厚生労働省委託事業として開催されているコミュニケーション技術研修法に反映させる。

### 1-4. 各医療者のコミュニケーション特性に関する研究

得られた結果を下に薬剤師・療法士に必要なコミュニケーション技術のための教育プログラムを作成し、厚生労働省がん医療研修会（リハビリ研修）に反映させる。

## 4. 倫理面への配慮

研究に関する倫理指針、及び臨床研究に関する倫理指針を遵守し、研究は各十施設の倫理委員会で承認された後、対象者には研究について十分な説明・同意を得た上で協力を頂く。また、そのデータ保管に関しても、番号を振り、厳密に管理をする。

## 5. 発表論文

該当なし

## 6. 研究組織

①研究者名	②分担する研究項目	③所属研究機関及び現在の専門 (研究実施場所)	④所属研究 機関にお ける職名
内富庸介	がん医療者に望まれる行動 に関する研究	国立がん研究センター 精神腫瘍学 (岡山大学・国立がん研究センター)	教授
森田達也	腫瘍医が直面する難しいコ ミュニケーション場面に指 針を示すための実験心理学 的研究	聖隷三方原病院 緩和医学 (同上)	副院長 部長
岡村仁	療法士のコミュニケーション に関する研究	広島大学大学院保健学研究科 リハビリテーション医学 (広島大学医学部附属病院)	教授
稲垣正俊	薬剤師に必要なコミュニケ ーションに関する研究	岡山大学病院 精神医学 (同上)	講師